

## 問題解決能力育成のための介護技術演習メソッド開発に関する研究 —A短期大学介護技術講習会のアンケート調査を手がかりとして—

### A Study on developing the training method of nursing skills for improving the ability of solving problems

#### —Based on the result of the questionnaires at the meeting for training nursing skills in A junior college—

佐藤 真\* 中澤 秀一\*\*

SATO Shin NAKAZAWA Hidekazu

Recently the style of the education that the students at the training institution for care workers receive, is mainly cramming knowledge.

It is not suitable for improving the characters of "The image of the ideal care worker", studying themselves deeply, cultivating the younger generation, imagination, thinking, sensibility, the ability of solving problems and practicing.

So PBL (problem-based learning) was applied to the exercise at the meeting for training nursing skills in A junior college.

As the result, it was effective to some extent, but it is not guaranteed that applying PBL itself to the education for training care workers, is effective. And it also has problems.

However, in the first place PBL is the method that logically integrates knowledge like the education for training old men care workers in Germany. In the second place, it is the education method that complies with the process of the learning theory "ACT", and in the third place, it is the learning method that is the same process of the thinking for solving problems.

キーワード：介護福祉士，実践力，思考過程，問題基盤学習

Key words：care worker, A practical skill subject, Process of thinking, PBL (problem-based learning)

### 1. はじめに

小論では、社会に望まれる介護福祉士の指標である「求められる介護福祉士像<sup>1)</sup>」の資質を満たした介護福祉士を養成するため、その教育方法のあり方に関する研究の一部として、特にA短期大学で行われた介護技術講習会受講者におけるアンケート調査結果を手がかりとして、「介護技術演習」の効果的な教育方法を明確にすることを目的とする。

A短期大学の在籍学生の年齢は、18歳～21歳である。この世代が過去に受けた教育は、科目内容に基づいた学習が主流である。そのため、知識詰め込み型の教育が中心になり、学生の思考力や判断力、創造力の低下が問題になったことから義務教育段階において「総合的な学習の時間」が設けられているといえる<sup>2)</sup>。これらの能力の低下は介護福祉士養成教育でも同様であり、その目標ともいえる「求められる介護福祉士像」の資質である自己研鑽・後進の育成・想像力・思考力・感性・問題解決能力・実践力を向上する教育内容には、現状では成り得て

いないといえよう。

たとえば、介護福祉士資格制度のモデルとなったドイツの老人介護士の養成教育では、これまでの学科中心教育から、介護過程の観点から論理的に知識を統合する方法、つまり、介護過程の展開に焦点を絞っている。その具体的な教育方法は、プロジェクト方式、ガイドテキスト方式、ケーススタディ、シナリオ方式、シミュレーション方式、およびロールプレイである。その結果、看護師に比べて社会的に地位が低い資格であると考えられていたドイツの老人介護士は、新カリキュラムになったことで、医療関連資格の一つとして国レベルで認知されるようになったのである<sup>3)</sup>。

これに対して、現状の介護福祉士の専門性は「介護福祉士の更なる質の高い専門性を確立していくためには常に時代の変化と社会的求めに対応し、介護の持つ独自性と専門性を明らかにして、介護専門職が拠って立つところの介護独自の価値体系と理論体系、さらに技術体制の構築の研究を進めていかなければならない<sup>4)</sup>。」といわ

\*兵庫教育大学（基礎教育学系） \*\* 湊川短期大学

平成20年10月17日受理

れている。しかし、介護福祉士の業務は、知識や技術、倫理観があれば行えるというものではない。つまり、介護福祉の対象は個人個人の事情や障害によりニーズは違うのであるから、実際に介護現場で問題に遭遇したときには、蓄えた知識や技術、さらには文献などをもとに解決案を作れる人材、すなわち、実際の問題場面に適用するための具体的な文脈を提供できる資質を身につけることが重要といえる。したがって、いま我が国では「求められる介護福祉士像」の資質を習得した介護福祉士を養成するための教育方法を開発することが急務といえるのである。

これらに関する先行研究としては、末廣<sup>5)</sup>や木下ら<sup>6)</sup>があるが、これらは介護過程の教育方法に関するものであり、介護技術演習での教育方法の開発に焦点化された研究は、これまでには存在しない。また、奥田ら<sup>7)</sup>のPBLに関する研究も介護過程の展開の教育方法についてであり、実技科目の教育方法に関するものとは異なっているといえよう。

これらの先行研究を踏まえた本論文の特徴は、「介護過程のアセスメント能力を育成するためには、アセスメントの方法を学ぶだけでは不十分で、関連する諸科学の

知識の統合が必須である<sup>8)</sup>。」というように、介護過程の考え方を机上で理解させる教育方法ではなく、実技演習において問題解決過程としての思考過程に沿った教育方法を検討した点である。

なお、研究方法は、「求められる介護福祉士像」に即した介護福祉士を養成するために、A短期大学における介護技術講習でのアンケート調査結果を手がかりに、近隣領域の教育方法や諸外国での教育方法を踏まえて介護技術演習における効果的な教育メソッドを開発することである。

## 2. A短期大学における介護技術講習会（以下、「介護技術講習会」という。）の演習内容

介護技術講習とは、平成17年度より導入された制度で、介護福祉士国家試験の1次試験である筆記試験に合格した者が、2次試験の実技試験について、あらかじめ実技試験か介護技術講習のいずれかを選択し、介護技術講習を受講して修了した者については、本人の申請により、引き続いて行われる次の3回の実技試験は免除されるというものである。

A短期大学では、平成17年度及び平成18年度に各2回

表1 第1回～4回介護技術講習会の講義及び実技指導への回答結果

処理したケースの要約						
	有効数		ケース欠損		合計	
	N	パーセント	N	パーセント	N	パーセント
	回数*講義内容	123	100.0%	0	.0%	123
回数*実技指導	122	99.2%	1	.8%	123	100.0%
回数*演習が職場で役に立つか	121	98.4%	2	1.6%	123	100.0%

回数と講義内容のクロス表				
回数	講義内容			合計
	とてもわかりやすかった	わかりやすかった	あまりよくわからなかった	
1	20	12	0	32
2	11	17	1	29
3	14	16	1	31
4	20	10	1	31
合計	65	55	3	123

回数と実技指導のクロス表				
回数	実技指導			合計
	とてもよくわかった	よくわかった	あまりよくわからなかった	
1	16	13	3	32
2	11	16	2	29
3	11	18	1	30
4	22	7	2	31
合計	60	54	8	122

回数と演習が職場で役に立つかのクロス表				
回数	演習が職場で役に立つか			合計
	とても役に立つと思う	役に立つと思う	あまり役に立たないと思う	
1	20	12	0	32
2	13	15	0	28
3	18	12	0	30
4	19	11	1	31
合計	70	50	1	121

ずつ、合計4回の介護技術講習会を述べ123名に対して行った。そして、各回とも質問紙によるアンケート調査を最終日に行いその場で回収した。(回収率は100%である。)質問内容は、①講義内容、②実技指導、③演習が職場で役に立つかについて問うものであった。その結果について、クロス集計した結果は表1のとおりである。

介護技術講習会を受講して、『講義内容はわかりやすかったですか』に対しては、「とてもわかりやすかった」65名、「わかりやすかった」55名、「あまりよくわからなかった」3名であり、「とてもわかりやすかった」と「わかりやすかった」との合計は120名(97%)であった。次に、『実技指導はわかりやすかったですか』に対しては、「とてもよくわかった」60名、「よくわかった」54名、「あまりよくわからなかった」8名であり、「とてもよくわかった」と「よくわかった」との合計は114名(93%)であった。また、『演習が職場で役に立つと思いますか』に対しては、「とても役に立つと思う」70名、「役に立つと思」50名、「あまり役に立たないと思う」1名であり、「とても役に立つ」と「役に立つ」との合計は120名(99%)であった。以上の結果から、講義内容・実技指導は90%以上の受講者に対して効果があったといえる。

それでは、介護技術講習会の実技指導内容に焦点を当て、課題演習の教育方法について見てみよう。

介護技術講習会は、講義と演習により構成されている。まず、介護技術講習会の「介護過程の展開」の講義では、第1にICF(国際生活機能分類)を用いて利用者の生活機能を全人的に捉え、生活機能の向上や改善を目指すこ

とを理解させる。第2に課題演習で使用する2事例について理解させることを主に行なう。また、実技演習科目については、第1にそれぞれの項目における意義と目的、介護等のポイントと留意点についての講義する。第2に講義終了後にそれぞれの項目における課題演習を行う、というものである。

課題演習では、受講生32人に対して、総括責任者としての主任指導者1名と受講生8人単位に対するチューターとしての指導者を各1名ずつ配置する。受講科目は、「介護過程の展開」「コミュニケーション技術」「移動の介護」「衣服の着脱の介護」「排泄の介護」「食事の介護」「入浴の介護」という項目であり、それぞれについて、2事例の課題演習を行うものである。

特に、介護技術講習会では、受講生に問題解決過程としての介護過程に基づく思考力を習得してもらうことを目標としている。したがって、課題演習の教育方法を検討した結果、介護技術演習では一般的といえる、「教員の模範演技の後に学生が真似る」演習であると、思考力や問題解決能力が向上しないと判断した。そのため、介護技術講習会の課題演習では、PBL(problem-based learning: 問題基盤型学習)チュートリアルを採用したのである。

PBLには、ビジネススクールのケーススタディ方法、指針にもとづいた意思決定・計画法、マクスマスター大学医学部のPBL法、また研究方法など、さまざまな形のプログラムがある。しかし、これらのPBLに共通していることは「学習を進めるために問題を使用する」という

表2 A短期大学介護技術講習会課題演習の流れ

①	②	③	④	⑤	⑥
情報収集	分析	介護計画	実施・観察	評価・考察	まとめ
指導者から、演習課題の確認後、グループ全員から目的を達成するため、生活上の情報・留意点を引き出す。	指導者から、環境としての介護福祉士のかかわりについてグループ全員と討議する。	小グループに分け、手順についてグループワークを行う。	グループ全員に戻り、介護者役、利用者役がロールプレイを実施する。他の受講生は観察者として参加する。	1名が終了後、介護者役、利用者役、観察者でそれぞれの振り返り・評価・考察を行う。(指導者の模範演技も含む)	チェックポイント表から自己評価、及びまとめを行う。

ことである。この学習は、教師によって提示されたシナリオという事例に関する簡単な説明文の中から課題を見出し学習に取り組む。そして、チューターといわれる教師によって導かれながら小グループによって主体的に取り組む方法である。このようなことから、この学習方法を成功させるためには、問題解決、小グループ活動、主体的な学習、メンバー間の相互依存、自己評価等のスキルを有していることが要件となるのである<sup>9)</sup>。

介護技術講習会の課題演習の一連の流れは、表2のとおりである。

このように、介護技術講習会課題演習の流れは、問題解決過程としての介護過程の展開に沿ったものである。詳細は、表2の①～⑥のように、介護過程の展開に基づく思考能力を向上させることを目標として、指導者がチューターになり、グループメンバーの意見や考え等を軌道修正しながら、受講生自らが問題を発見し、グループで主体的に学習を進めていく教育方法である。

この結果、多くの受講生が課題演習の実技指導に対して理解できたという結果が表れたといえよう。

### 3. 介護技術講習会における教育方法の課題

ただし、アンケート調査結果の自由回答からは、まず第1に課題演習について「よくわかった」「あまりよくわからなかった」という回答の中でも「指導者により説明が違う」また、「聞いても答えられない人がいる」など、チューターの力量を問う意見があった。

この点に関しては、介護技術講習会の指導者（チューター）は6名のうち4名が介護現場で5年以上勤務している施設職員が占めている。しかし、これらの指導者（チューター）は、介護現場では主任クラス以上であることから、職員の指導や実習生の指導を行ってはいらぬものの、教員としては未経験であることから、第1回目は受講生に対して上手く指導できていない様子が伺えたのである。

PBLチュートリアルの場合、チューターは目標を達成するために非常に重要な役割を担っている。そこで、1日の終了後に演習方法を統一するためリフレクション・ミーティングを行った。その結果、第2回、第3回、及び第4回の介護技術講習会では「説明が上手であった」「丁寧な説明だった」という自由記述での意見が51件であった<sup>10)</sup>。このことから、チューターの指導力を向上させるためには、チューター自身もリフレクションを積み重ねることが重要であるといえよう。

また、第2に「模範演技をはじめに行ってもらえないから困った」という記述も2例あった。受講生の中には、通信教育生なども含み、介護場面をイメージできない者もいる。そのため、実技演習中は「絶えず不安だった」ということであった。しかし、「指導者の実技指導はわ

かりやすかったですか」の問いに対しては、「よくわかった」「わかった」と回答されており、「この演習が職場で役に立つか」という質問に対しても「とても役に立つと思う」「役に立つと思う」と回答しており、「わからなかった」「役に立たない」という回答はなかったのである。

この点について、受講生全体からの自由記述では、グループワークで「質問が自由にできた」「みんなで考えたので疑問がわかった」「刺激を受けた」「掘り下げて考えることができた」等、効果的であるとの意見が43例述べられている。このことから、介護技術に関する基本的な事項や実践を行ったことがない者に対しても、PBLチュートリアルは効果的であるといえる。

以上の結果から、介護技術講習会の課題演習の教育方法は、一定程度効果があったといえよう。ただし、この課題演習の教育方法をそのまま介護福祉士養成教育に用いることが、すべてにおいて効果的であるという保障はなく、課題が残るものともいえる。

その理由としては、介護技術講習会の受講生のほとんどは、施設や在宅等の介護現場で働いている人達である。それに対して介護福祉士養成施設に入学してくる学生は、介護現場も知らずに入学してくる者がほとんどである。したがって、PBLチュートリアルを行うにしても、介護に対してイメージできていない者がほとんどであることから、問題や批判的思考、推論などを学生自身が主体的に学ぶには限界があるといえよう。

この点では、A短期大学介護技術講習会の課題演習での教育方法をそのまま行うことだけでは不十分であり、さらなる検討が必要といえよう。

### 4. 介護技術講習会の課題演習の教育方法の問題点

A短期大学学生の入学動機に関して、卒業時に行った1期生から4期生までのアンケート調査の回答では、「介護コースが新設されたから」「自分で選んできめた」「介護の仕事がしたかった」でほぼ8割を占めている。しかし、このような目的意識を持って入学してきた学生でも、介護に関する知識は当然ながら十分に理解されているとは言い難い。そのような学生に対して、問題解決過程や介護過程を教授しても十分な理解が得られるとは考えられない。したがって、介護過程の展開をペーパー上で教育する以前に、介護過程の展開を実体験させることが重要といえよう。

そこで、A短期大学介護技術講習会の実技指導内容における課題を踏まえて、介護技術演習で改善する必要があるPBLチュートリアルの内容について見てみよう。

この教育方法の流れは、おおよそ①情報（課題）の提示。②知る必要のある事柄の自己確認（学習）。③情報の共有（グループワーク）。④グループの考え方を共有

するため全体での発表となる。

まず、①情報（課題）の提示、及び②知る必要のある事柄の自己学習での問題点としては、受講生に対して当日行われる課題演習についての事前学習を課さなかったことである。そのため、演習課題を目にするのは当日になり、そのことで課題に対する情報収集が曖昧となり、アセスメントを意識することなくロールプレイを行う例が多く見られたのである。この点に関して、アンケートの回答では「最初は演習がわからなかったが、2回目から事前に本を読んでいったため分かるようになった」という記述が1例あった。

すなわち、ここでの重要点は、第1に今日まず最初に「この時間、自分は何をするのか」という各活動の最初に学生自身が自らの課題を確認すること。第2にそれに対する自己評価にもとづいて次の活動をデザインしていくことであるといえる<sup>11)</sup>。また、PBLでは自分の学びたい内容を重視するのではなく、自分が学ぶ必要のある内容を重視し、問題を解決するために焦点をあてる必要のある課題を重視すべきであるから、事例を与えて、情報収集やアセスメントは事前学習させることが必要となるのである。

次に、③情報の共有（グループワーク）では、チューターが一人一人のロールプレイ後に介護者役、利用者役に対して意見を聞き、また観察者役のグループメンバーには批評を行わせた。ただし、この場面での課題は、グループメンバーが他者の目や耳を意識しているので、批評や批判的思考とはなっていないという点である。なかには、「良かったと思います」「上手でした」という抽象的な感想があり、さらに、ほとんどのグループメンバーは、ロールプレイ中にメモをとる者が一人もいなかったのである。丸山は「教育実習生は複数の視座を相互に関係付けての観察に至っていないという課題が明らかになった<sup>12)</sup>。」と述べているが、A短期大学介護技術講習会の受講生も同様であるといえよう。

すなわち、ロールプレイング後のリフレクションでの意見や批評はグループ全体の思考活動を喚起するものとなっていなければ、その効果は半減してしまうのである。したがって、観察者には他者のロールプレイングには詳しくメモを取らせることが必要になり、「良かったと思います」などというような抽象的・概括的な批評が出た場合には「どのような振る舞いから、そう判断したのか」「どんな点が良いのか」など、具体化させることが重要になるといえる<sup>13)</sup>。

そのため、チューターの役割としては、学習の実態と指導技術との関連を内省させるために、考える意欲を誘発する発問、つまり葛藤を生み出し思考を揺さぶる発問となっているか等の発問の質を検討することが必要といえよう<sup>14)</sup>。

また、チューターが受け持つ学生数であるが、A短期大学の介護技術演習の場合、学生数25～30名に対して3名の教員で対応している。この場合、ベッド数は6ベッドであるが、演習を行う学生数により4ベッドまたは3ベッドになる場合もある。ただし、3ベッドの場合は3名の教員がチューターとなるので問題はないが、40名の学生数の場合6ベッドに分かれることもある。この点について、奥田ら<sup>15)</sup>は3名の教員が5グループを分担したと報告している。このことから、1名の教員が2グループを担当することは可能であるといえるが、1名の教員が複数のグループを受け持つときには、PBL開始時までに学生の学ぶべき学習概念の明確化、及び終了後の学習の方向性の確認や学生の姿勢、戸惑いの有無を確認するためのミーティングを行うことが重要といえよう。

## 5. 介護技術演習メソッド開発における具体的教育方法の検討

それでは、上記の課題を踏まえて介護技術演習における具体的な教育方法について見てみよう。

介護における問題解決能力とは、介護過程に基づく思考過程のプロセスを習得することといえる。そのためには、学生の問題解決能力を客観的に把握するための手立てが必要となる。そこで、介護過程における思考過程を分析し、それを習得する過程を図1のように示した<sup>16)</sup>。

さらに、このプロセスを学習するための介護技術演習メソッド及びワークシートを作成した<sup>17)</sup>。

この理論的背景について述べると、ジョージ・アンダーソンによって開発された学習理論の一つであるACTでは、熟達者は宣言的知識と手続き的知識の繰り返しで強化され、記憶が呼び出されやすくなっているといわれる<sup>18)</sup>。宣言的知識とは、書物や教材あるいはなすべきことを告げられることから得た知識の種類であり、熟練したパフォーマンスを達成するためには、宣言的知識を手続き的知識として知られる行動へ変換できなければならないのである<sup>19)</sup>。この点について、古賀は熟達者と初心者の違いに「問題解決に用いられた知識や概念はほぼ同様であるが、知識や概念の関係性に差があった<sup>20)</sup>」と述べている。

すなわち、ACTにおいて認知スキルを獲得する上において、3つの連続した段階を通じて人間は進歩するといえよう。それは、第1にシステムの宣言的ネットワーク構造に組み込まれる領域関連の事実の蓄積。第2に経験を積むにつれて宣言的知識は手続き的知識になる。第3に手続化の段階では、獲得されたプロダクション（条件／行為ルール）が調節され円滑にされ進歩する<sup>21)</sup>という段階である。

換言すれば、介護技術演習におけるPBLチュートリアルの場合、演習の前段階に基礎的知識の講義を行い、ワークシートによる事前学習やグループワークによって宣言

思考のプロセス	
0	演習課題から、気づきや疑問を持つ。(課題の把握)
1	情報に着目する。(情報の収集)
2	情報から問題を見だし、理由を挙げて予想を考える。(情報の分析)
3	情報を制御する。(課題の明確化)
4	介護方法を考え、見通しを持って計画を立てる。(計画の立案)
5	実践した結果を、情報と関係付けて考察する。(結果の考察)
6	新たな問題を見だし、情報を制御した介護計画を立てる。(考察の整理・統合)

図1 思考のプロセス

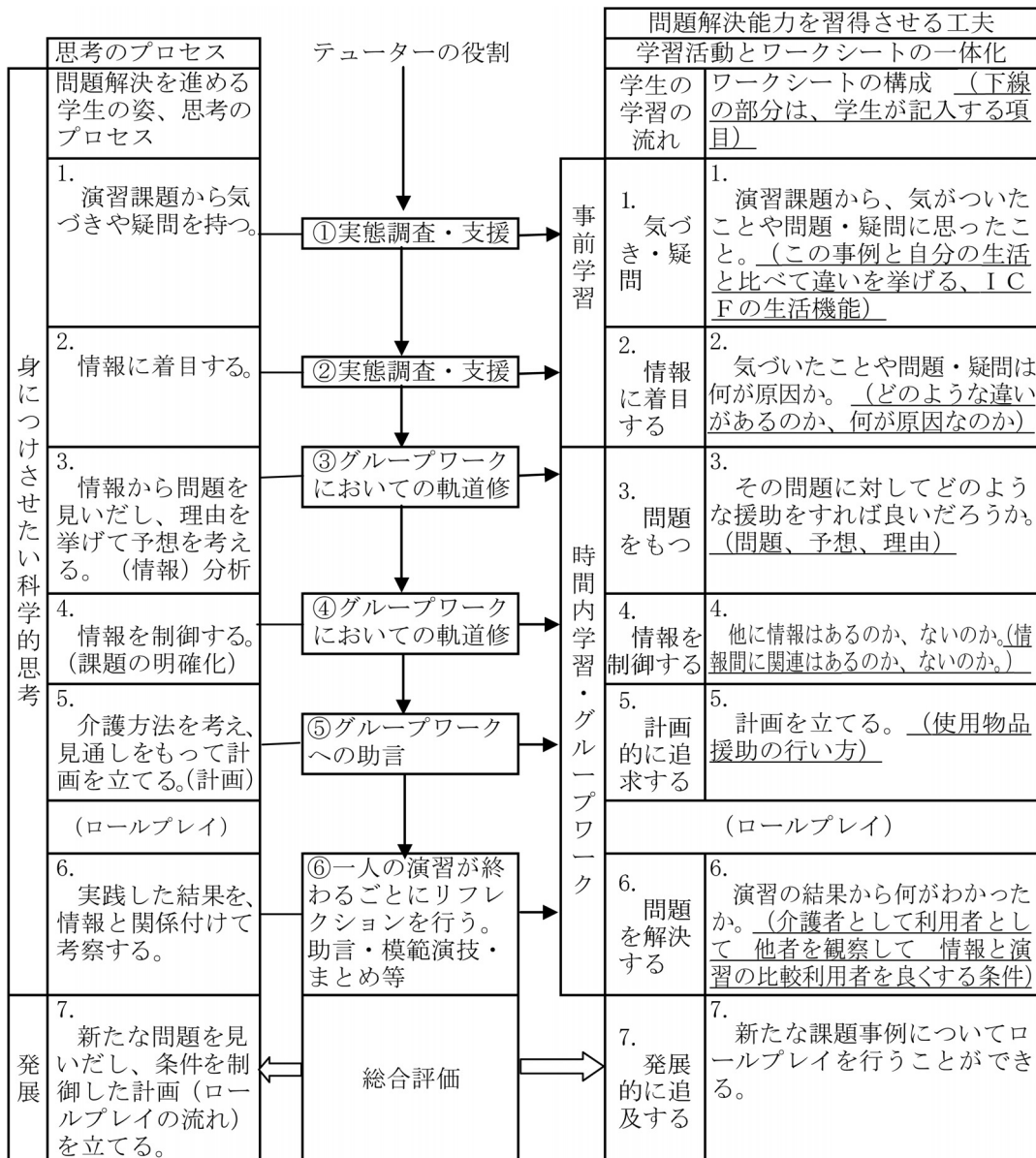


図2 評価・指導・学習活動の流れ

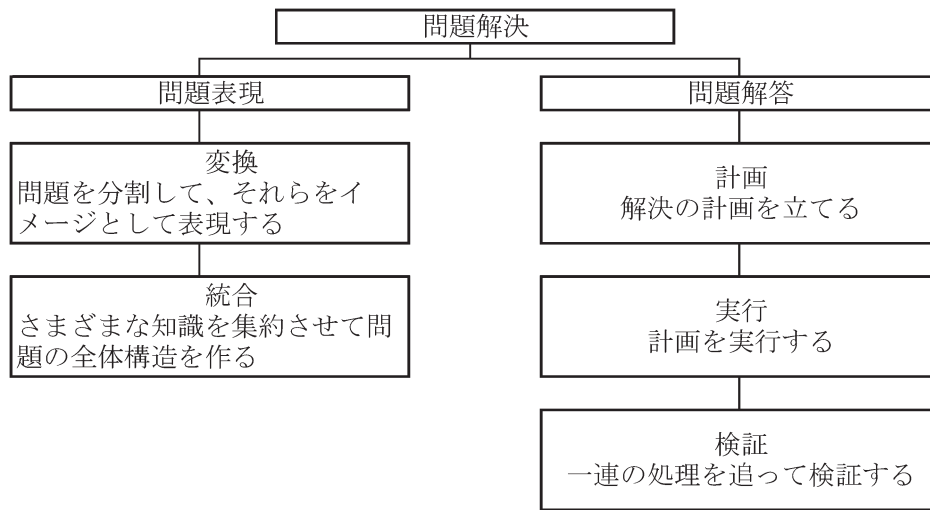


図3 問題解決の過程

的知識を蓄積する。そして、ロールプレイを繰り返し経験させることで手続的知識へと移行する。さらに、チューターとグループメンバーにおける観察や考察を行うことにより、獲得されたプロダクション（条件／行為ルール）が調節され円滑にされ、進歩するのである。

図2に思考のプロセスに対応した学習の流れ、及びチューターの指導に関する役割を各段階に沿って示した。

まず、第1に、チューターの役割としては、事前学習を行うためのワークシートを作成（図1の右の下線の項目）し、配布することである。ここでは、時間内学習及びグループワークまでに、学生は事前学習を行って来ることを求められる。その内容は、学生に課題事例からICFの生活機能上の情報を収集させて、そこから学生自身の生活機能とどのような相違があるのか、また、その違いは何が原因なのかに対して学習をさせて、課題事例に対するリアリティを想起させるのである。

これは、事前学習の1. 気づき・疑問と2. 情報に着目との部分に対応する部分で、ワークシートを配布した事前学習になるが、ここでの評価は、演習を行うに当たりどれだけの事前学習を行ったのか、その内容や質に対する評価が重要になる。

第2に、3. 問題を持つと4. 情報を制御、そして5. 情報を制御とに対応する部分での評価は、実際にグループワークを行っている場面における参加態度や発言内容を対象とする。

第3に、6. 問題解決に対応する部分での評価では、他者のロールプレイを観察する態度や的確な批評力を対象とする。

問題解決の思考の流れを示すと、図3のように問題表現と問題解答の二つの段階に分けられるのである<sup>21)</sup>。

介護技術演習におけるPBLチュートリアルの場合には、事前学習において課題事例から情報収集、自分の生活と

の違いを学習させるが、これは図3の問題表現から変換、統合の流れと同様の思考過程を踏ませることになる。また、時間内学習では、問題を持つ、情報を制御、計画的の追及、問題解決、発展的な追求という流れになるが、これは図3の問題解答から計画、実行、検証と同様の思考過程を踏むことになるといえるのである。

すなわち、このような思考のプロセスを学習することが、問題解決能力を習得することにつながるといえよう。

## 6. おわりに

以上、A短期大学卒業生のアンケート調査から、問題解決能力育成のための介護技術演習メソッド開発に関する一試論としてPBLチュートリアルを用いた教育方法について検討した結果、効果的な教育方法の運用原理が一定程度明らかになったといえよう。

すなわち、第1に、介護技術演習におけるPBLチュートリアルは、ドイツの老人介護士養成教育と同様に個々の介護事象に対して介護過程の観点（問題解決過程の展開）から論理的に知識を統合するという方法であるといえる。

第2に、介護技術演習におけるPBLチュートリアルの過程は、①演習の前段階に基礎的知識の講義を行う。②ワークシートによる事前学習やグループワークによって宣言的知識を蓄積する。③ロールプレイを繰り返し経験させることで手続的知識へと移行するという、学習理論のACTの過程に沿った教育方法といえる。

第3に、介護技術演習におけるPBLチュートリアルは、問題解決の思考の流れと同様の思考過程を踏む学習方法であるといえる。

これらのことから、介護技術演習におけるPBLチュートリアルは、問題解決思考に基づく教育方法として一定程度理論的妥当性があるといえよう。

なお、本研究は実技演習に限定した問題解決思考育成のための教育方法について検討したが、これをどのように記録として表現するのかという能力の育成については残された課題といえる。これについては筆者の今後の課題としたい。

#### [註]

- 1) 詳細は、厚生労働省「これからの介護を支える人材について－新しい介護福祉士の養成と生涯を通じた能力開発に向けて－」『介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会報告書』2006年、p.10を参照のこと。
- 2) 奥田紀久子・近藤益弥「介護福祉教育におけるPBLに基づいた主体的学習の試み」『瀬戸内短期大学紀要・第36号』瀬戸内短期大学、2005年、p.83に詳しい。
- 3) 詳細は、中川義基「ドイツの新しい老人介護教育」『介護福祉教育・第9巻第2号（通巻第17号）』日本介護福祉教育学会、2004年、pp.25-36を参照のこと。
- 4) 厚生労働省「第4回介護福祉士試験の在り方等介護福祉士の質の向上に関する検討会」『II. 養成施設の課題1. 質の高い介護福祉士の養成と専門性の確立』2004年に詳しい。
- 5) 末廣洋子「介護過程教授についての一考察」『介護福祉教育・第11巻第2号（通巻第21号）』日本介護福祉士教育学会、2006年、pp.56-63に詳しい。
- 6) 木下寿恵・森扶由彦・大林博美・藤原秀子「介護過程－問題志向型と目標志向型の一考察－」『介護福祉教育・第11巻第1号（通巻第20号）』日本介護福祉士教育学会、2005年、pp.50-54に詳しい。
- 7) 詳細は、奥田紀久子・近藤益弥「介護福祉教育におけるPBLの基づいた主体的学習の試み」『瀬戸内短期大学紀要・第36号』瀬戸内短期大学、2005年、pp.83-91を参照のこと。
- 8) 川島麻子・多口多恵子・丹佳子・井上真奈美・田中愛子「基礎看護学領域における看護実践能力の育成に向けた演習の試みと課題－看護基本技術の習得に向けて－」『山口県立大学看護学部紀要・第9号』山口県立大学看護学部、2005年、p.63に詳しい。
- 9) ドナルドR. ウッズ著、新道幸恵訳『PBL, Problem-based Learning判断能力を高める主体的学習』医学書院、2003年、p.5。
- 10) 湊川短期大学では、平成17年度に2回及び平成18年度に2回の計4回の介護技術講習会を行っている。そのすべてに、同一のアンケート調査を行っており、よりよい介護技術講習会になるための参考としている。
- 11) 島田希「プロジェクト・アプローチによる主題探求型学習活動の生成と論理－大阪府茨木市立F小学校におけるアクション・リサーチをもとにして－」『カリキュラム研究・第15号』日本カリキュラム学会、2006年、p.22に詳しい。
- 12) 丸山範高「授業リフレクションでの問題解決に関する一試論－国語科教育実習生の場合－」『広島大学付属中・高等学校中等教育研究紀要・第51号』広島大学付属中・高等学校、2004年、p.1に詳しい。
- 13) 前掲論文12) p.6に詳しい。
- 14) 前掲論文12) p.7に詳しい。
- 15) 詳細については前掲論文2) p.87を参照のこと。
- 16) 五十嵐俊子・東原義訓「理科における問題解決能力を育てるための評価方法の開発」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要「教育実践教育研究・No4」』信州大学教育学部附属教育実践総合センター、2003年、p.60に詳しい。
- 17) 前掲論文16) p.61に詳しい。
- 18) 古賀節子「熟達者と初心者の問題解決場面における思考の相違－看護師と看護学生の情報処理アプローチによる知識表象の比較－」『日本赤十字九州国際看護大学intramural research report・vol.4』日本赤十字九州国際看護大学、2005年、p.84に詳しい。
- 19) 長町三生『認知心理学講座3・問題解決』海文堂出版、1992年、p.129に詳しい。
- 20) 前掲論文18) p.95に詳しい。
- 21) 前掲書19) pp.129-130に詳しい。
- 22) 東千秋・柴山盛生・遠山絃司『問題解決の発想と表現』放送大学教育振興会、2006年、p.44に詳しい。